

主語の補い方 確認テスト（古典読解） 解答・解説

■ 解答・解説

問1 女房。／格子を下ろすのは、仕える側である女房の役目。敬語が用いられていない点も、動作主が女房（高貴でない者）であることと合う。

問2 主語の継続の手がかり。「て」は前後で主語が変わりにくいため、①「下ろし」と②「申し」はいずれも女房の動作だと判断できる。

問3 主語＝女房。根拠＝「申し」は謙譲語で、動作の受け手（言葉をかけられる相手）が高貴な姫君であることを示す。へりくだって「申し上げる」のは仕える側の女房だから。

問4 「申しければ」の「ば」は主語が変わりやすい接続助詞。女房が「申し上げた」のを受けて、別人である姫君が「お起きになる」と動作主が交替する。敬語も謙譲（女房）から尊敬（姫君）へ変わっており、主語転換を裏づける。

問5 主語＝姫君。根拠＝「給ふ」は尊敬の補助動詞で、動作主が高貴な人物であることを示す。ここで高貴なのは姫君なので、起きるのは姫君。

問6 （例）姫君ははっと目をお覚ましになって、お起きになる。（主語＝姫君）

問7 中將。「のぼり給ひ」の「給ひ」は尊敬語で、高貴な男性である中將を高めている。簀子に上がってくるのは訪問者の中將。

問8 主語＝中將。／敬語の種類＝謙譲語。「参る」は「（高貴な姫君のもとへ）参上する」意で、訪ねる側の中將がへりくだった表現。「久しく参らなかつた罪」と自分の非礼を述べている。

問9 中將。「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語で、高貴な中將の発言を高めている。直前の会話文の話し手なので主語は中將。

問10 （例）長い間参上しなかつた罪を、どうして（あなたは）お許しくださるだろうか（いや、許してくださるまい）。＝久しくお伺いしなかつた非礼を、どうかお許しいただきたい、の意。

問11 姫君。「給ひ」は尊敬語。恥じらって几帳の内に入るのは高貴な姫君。

問12 女房。御文を取り次ぐのは仕える側の女房の役目。敬語が付いていない点も動作主が女房であることと合う。

問13 主語は継続している。「て」は主語が変わりにくい接続助詞なので、⑧「取り」も⑨「奉れ」もともに女房の動作。取り次ぎ役の女房が文を取って差し上げた、という一連の動作になる。

問14 主語＝女房。／誰への敬意か＝中將への敬意。「奉る」は謙譲語で、物を差し上げる相手（受け手）である中將を高めている。文を差し上げるのは取り次ぎ役の女房。

問15 中將。「うれしと思ひ」と感情を抱くのは、文を受け取った中將。直後の「開け給ふ」と主語が一致する。

問16 中将。「給ふ」は尊敬語。文を開くのは受け取った中将。

問17 姫君。文脈から、中将に宛てた返事の文であり、恥じらいながらも思いを月に託して書いたのは姫君だと考えられる。「待つ夜の月」は待つ心を詠んだ女性側の表現として自然。

問18 (例)「(あなたを) 待つ夜の月 (が美しい／その月を私はながめています)」とだけ書いてあった。＝待ちわびる心を月に託した一文。

問19 中将。文を見る(読む)のは、それを開いた中将。

問20 中将。「給ひ」は尊敬語。文を読んでしみじみと感じ入るのは中将。

問21 中将。「のたまはず」は「言ふ」の尊敬語+打消で、高貴な中将がしばらく何も言わずにいる様子。

問22 ②→③(「申しければ」の「ば」で女房から姫君へ)と、⑥→⑦(「のたまふを」の「を」で中将から姫君へ)。この二箇所主語が転換している。

問23 (例)はじめは仕える女房が格子を下ろし姫君に申し上げる(謙譲語・「て」で継続)。「ば」で主語が姫君に転じ、尊敬語「給ふ」を伴って姫君が起き、中将が登場して発言する。女房が文を取り次ぎ(「て」で継続)、「を」「ば」を境に中将へ主語が移り、中将が文を開いて読み感じ入る。敬語の種類と接続助詞が主語交替の手がかりとなっている。
